

ホトトギス

昭和二十三年三月二十八日運輸省特別授受証第陸運第廿七号
明治二十一年十月十日第三種郵便物認可(毎月一冊)百五号行
平成二十年四月一日発行(第百一十一卷第四号)

ホトトギス

四月号



俳句随想 〔三百十〕

汀子

俳句は季題を詠む詩であると折に触れて申し上げている。一句の中に季題が働く俳句でなければならぬという。指導者によつては季重りを厳しく諫める人がいる。季題を大切にというのがと季重りはいけないと言ふのは又べつなのである。季重りをいけなと言つてはこれまでの有名な俳句の多くに問題があることになる。季題が二つ以上入っている俳句は沢山ある。それは季題としてではなく一つは別の季題を助ける、或いは補助するために使われなければならない季節の言葉と思えばよい。その二つの季節の言葉には主従の関係があればよい。季題を助ける季節の言葉が一句の中に使われても一向に差し支えない。

唯、一句の中に違う季節の季題が使われている場合は一句が散漫になってしまうので避けなければならぬであろう。ある選考会で春と夏の季題が重なっている一句があつて問題になつた。「春灯と若葉」である。この場合、「ともしびと若葉」或いは「春灯と記念樹」という表現にして欲しかった。季重りを駄目だと言っているのではない。

旬日記 汀子

平成十九年四月一日 関西野分会

虚子 記念 文学館の雀の巢
雀の巢らしとて出たり入つたり
四月一日 下萌句会

春雷のうつつに朝の雨上り
万愚節送られて来し旅切符
咲きそめて散るほはなきさくちか
声揃へ都踊の幕開きぬ
四月二日 ロイヤル俳優

霞見て霞に届かざる行手
利休忌や正座出来なくなりし今
折目とは心にありて利休の忌
筆摘み束ねてそれも一ブーケ
四月七日 菅屋ホトギス会

麗月空の広さを暖味に
明日のあるチューリップ皆眠りけり
蝶飛んで明るき明日に心置く
四月八日 虚子忌

花の旅花の遅速を言ふまじく
これよりは花の忌日として偲ぶ
四月十日 大阪倶楽部

み吉野の旅近づけて花曇
蛸軒生れて池の春秋はじまりし
すんなりと駐車出来しと木瓜の花
月欠けて欠けて麗となりけり
花麗吉野の心問ふたしかな
ふり返る月日は麗なりしかな
四月十日 綿業倶楽部

田楽の味噌に老舗のかくし味
み吉野の消息花に天候に
虚子忌過ぎ一氣に月日動き出す

四月十二日 清交社

入学の花活けて志消えまじく
桃の花伸びて日永といへざりし
予定又伸びて日永といへざりし
草餅の出来上々の大きさよ
四月十三日 工業倶楽部

萌え出でしはこべの色と分るほど
残さるる兎当番はこべつみ
四月十四日 吉野山くつろぎ

惜し気なき落花をさそふ風となる
よすうすとの花のペールを脱ぎし山
み吉野のさくせらの心問うて来し
白髪の花の化身となり給ふ
くつろぎ 第二句会

星を見に出て花冷の歩を返す
みよしのの星をのせたる花の闇
花明り吉野の闇を深くせり
四月十五日 くつろぎ第三句会

鯉覚めて花屑動きはじめけり
この宿の後継の武具飾らるる
くつろぎ 第四句会

どこからの落花といへぬ吉野山
みな花の縁抱きて取る家路
地震ありしこともうつつよ花の旅
四月十七日 有恒倶楽部

花の旅終へて心に残るもの
みよしの野の花に心を置いて来し
遠ざかる景に紛るる花一樹
ふるさとの如く訪ふ宿花の頃
別れ霜ありし朝と思はるる
予約ものに加は一年はじまれる
四月十七日 無名会

若芝を踏みて近道すること
象山の旅終へて仕事の待つてゐる

四月十八日 夏潮句会

若芝を踏みて体重のつてをり
旅一つ終へ旅の待つて風光る
今日のつ終へ目片つけて若芝に
風光る象の小川に沿ひ行けば
四月十八日 夏潮句会

咲き果つるためかチューリップに雨よ
崩れても崩れなくともチューリップ
何か咲き継ぎつ枝垂桜かな
変へてみる机の配置春灯
大橋を渡る観潮船を見て
崩れるはもう明日のなきチューリップ
春灯の明るさ加入へ学ぶ
四月二十二日 北海道ホトギス同人会

先づ春の寒さを問はん蝦夷の旅
祝ぎの宵春眠の朝断ちて旅
まだ木々は芽立の頃着陸す
春寒きことしばらくは心地よし
四月二十二日 北海道ホトギス俳句大会前日句会

白樺の林に春の色を置く
どこまでも林芽吹の色を置く
残雪の北海道を訪うてをり
四月二十三日 北海道ホトギス俳句大会

残雪の山に直進してカーブ
一斉の飛翔帰雁の声となる
四月二十六日 きさのき会

チューリップ咲かせオランダ身ほとりに
掌に乘せて子猫の軽さかな
からまりし網の子猫と気づくまで
チューリップ今年は赤と決めてをり
日本風オランダのチューリップ
四月二十七日 時雨句会

お隣と風の境界竹の秋
ここからは遠足自由行動の秋
一劃は金明竹の秋とこそ
設計図庭に及びぬ竹の秋
遠足とすれ違ふ風起りけり
四月二十八日 句会と講演の会

み吉野の旅はや遠し春惜む

廣太郎句帳

廣太郎

平成十九年四月二日 はせを句会発行会

嘯の上に海猫その上に鶯
磴登り切るや亀鳴く膝笑ふ
つばくろの一羽に漁港鎮もれり
春潮の音に吸はれて行く佳人
鶯の笛眼下に聞いて崖隴

四月五日 蕉心会

高橋よ常盤よ花よ彦様よ
亀鳴くやカチカチ山でハイジャンプ
マーラーのスコアの如く蝌蚪の群
一匹に目覚める蝌蚪の国であり
一片が驚かせたる蝌蚪の国

四月八日 虚子忌

忌心を重ね復活祭の朝
虚子偲ぶ復活祭となりにけり
晴れ晴れと阪神ファンも虚子忌人

四月九日 朝日カルチャー若草句会

古都といふ静寂にありて竹の秋
竹の秋雀のお宿この辺り
信号を一人で渡り入学す
竹の秋てふ水の色風の彩

四月十一日 一水会

春風に少し揺らぎし決意かな

浅蜷飯東男として果てん
四月十二日 土筆会

苗床に農の一徹始まれり
太陽を揺らめかせたる蝌蚪の群
その下の君は柳の精かとも
二三本揺れば風に和す柳

四月十四、十五日 吉野くつろぎの旅

建和美穂女青虎よ夕桜
散り込める落花夕日にはたと止み
鯉跳ねて落花一片誘へり
夜桜となりゆく先に何かある
目の慣れてきて春の星降り出せり
桜もう来年が始まつてゐる

四月十七日 草木瓜会

朝桜白衣の主日てふ色に
女性軍早出男性軍朝寝
NHK俳句に沸ける花の宿
来年の花へ自転の続く星

四月十九日 登高会

春暁の都心地下より動き出す
若草に鹿を放ちて南都かな
若草に十六文の靴沈む
春暁に白く明けたる吉野山
若草のさやぎに吸はれゆく羽音
春暁の夢は必ず君の居て

四月十九日 登高会

義士祭の香煙地下を出でしより
耳の先びくと子猫の目覚かな
梨の花よりも白きは汝が心

好奇心とは人の子に猫の子に
目は父似耳は母似の子猫かな
梨花抜けて梨花抜けて梨花抜けて多摩
四月二十一日 諷詠四百号祝句

暖かき心語られ寿

四月二十二、二十三日 北海道ホトトギス同人会、大会

一面の雲を眼下に飛機うらら
雲切れてより霾の大地かな
露の臺蝦夷の大地を潤せり
蝦夷の空広々と霾曇かな
手稲山羽衣めきし雪解靄
雪解靄晴れゆく先の手稲山
わつと翔ち春の雁空塗りつぶす
雁帰るまでの毎なる水面かな

四月二十四日 若水句会

緑立つ蝦夷への旅を終へてより
畦塗つてより雨がちとなる大地
栄螺焼けたで早よ酒を持つてこい
栄螺食ぶ日曜の午後六時半
緑立つ三百年の枝振りに

四月二十五日 目黒学園句会

子猫飼ふことにしたから泣かないで
春の宵ウイン妖しく輝けり
もう敵と味方知つてる子猫かな
吉野てふ人を惑はす花であり

四月二十八日 ホトトギス社句会

太陽を絡ませて種蒔きにけり
からし種蒔いて福音書の世界

雑詠

廣太郎 選

草の絮飛んでそこいらぢゆう晴れて 香川 湯川 雅
 大地より剥れさうにも冬の晴 同
 繋ぐ手の無ければ風へ落葉徑 同
 一山の露ことごとく星宿す 神戸 山田弘子
 わが星も共に歩める露けさよ 同
 人の灯も未枯いろにある湖国 同
 曼珠沙華大地マグマを噴き出せる 福山 竹下陶子
 虚子選の朱筆六十年の秋 同
 籐寝椅子八十年の波乱あり 同
 峰寺へ薄々紅葉薄紅葉 長岡 安原 葉
 峰寺の一と日刻々薄紅葉 同
 師の忌日濟めば濃くなる山紅葉 同
 喪の旅となりし故郷の山眠る 寧王岳 小俣紀子
 悴みて別れの言葉とはならず 同
 送葬の水洩とめどなかりけり 同
 何よりの小春日和の小城下に たつの 浅井青陽子
 禅寺の裏の溪水鳥瓜 同
 峽の里高み低みに懸大根 同

落葉踏む音の記憶の中に居り 八尾 岩垣子鹿
 冬帝に応へて天守閣の金 同
 一ト時雨ニ々時雨して山瘦せる 同
 淋しらの黄葉日当り輝けり 榎原 稲岡 長
 短日の夕影曳きて樹もひとり 同
 さびさびと椽の木黄葉落ち続く 同
 祇王寺に時雨落柿舎には晴れし 熱海 嶋田 一步
 落柿舎の縁に時雨来日差しも来 同
 落柿舎北公衆便所時雨けり 同
 今日の雲今日だけのもの冬晴るる 同
 おしやれより今は冬菜を育て棲む 嶋田摩耶子
 十二月なれど熱海に吾の花壇 同
 風熄んで霜の声聴く独りの夜 神戸 千原 叡子
 霜晴の曾爾原を発つ旅靴 同
 朝寒やなほ星座ある湖畔宿 同
 大坂に馴染み粕汁かやくめし 東京 大久保白村
 蒲団干す独身寮の日曜日 同
 縁に干す蒲団に坐り生家なる 同
 顧みて八十路となりし年惜む 福岡 松尾 緑富
 年の瀬の予定躓く些事ありて 同
 片付かぬ用何かにと年の内 同
 一本の花 花 柵の 曲り 角 龍ヶ崎 今橋眞理子
 柵の花の香土へ戻りゆく 同
 みちのくに初雪ありて忌日くる 同

雑詠句評（三月号より）

最近の「おむすび」は、すっかり市販されているものがお馴染みになってしまったが、やはり母さんが素手（ラップを間に入れるのも論外）で握ったものが絶対に美味しいのである。正にそんな情景がこの句から見て取れる。世界一美味しい「小春」のおむすびである。（廣太郎）

この丘の松茸山で在りし日も たつの 浅井青陽子

美奇・葉・むつみ
芳子・眞理子・憲明
保佳・中正・千鶴子
とほ歩・静龍・廣太郎

出来たてのおむすび受けし掌の小春 熱海 嶋田摩耶子

今握ったばかりのおむすび、ぱりぱりの海苔の香が食欲をかき立てる。「はい」と手渡されたおむすびは熱々。右に左に掌を転がしては頂いていると、ぬくぬくと心も掌も小春のだ。たとえ冷た嵐が吹こうと掌は、ほっこりと「掌の小春」になっている。読者も幸せになるようなお句。（美奇）

松茸は独得の香りを持ち、食用茸の代表種とされるように形、風味もよい。秋、山の赤松の林の落葉が多い松の周辺に生えるが、近年は乱開発の影響もあつてか松茸山が激減し、松茸は高級品となった。眺めのよいこの丘も、作者の若い頃は松茸山で、作者も松茸狩によく訪れたのであろう。丘の上に立つて往事を偲びながら、世の移り変りを想う作者の姿が浮かんでくる。（葉）
筆者の子供の頃は六甲山にも松茸の生える場所があつて、縄で仕切っていたような記憶があるが、現在は「松茸山」もめっきり減ってしまい、それだけ人工栽培の出来ないこの茸はとんでもなく高価になってしまった。作者も昔松茸山であつたこの丘をしみじみと眺めているのである。（廣太郎）

（以下略）

天地有情

江戸選

峰寺の山気身に入み来りけり
 握手して別れしことも露けしや
 コスモスや千へクトパスカルの風
 コスモスに風は一日の旅人かな
 菊の酒命いとしみ戴きぬ
 一病もよせぬ気構へ冬に処す
 隠棲の日々朝露に触るゝかな
 幻想となりしきのふの紅葉狩
 水亭の景に遅れし冬紅葉
 この鉢の蘭に魅かれし黄蝶かと
 冬霞む飛鳥の端に香具山も
 冬鳥の動きの見ゆる雑木林
 猪垣を人は跨いで行きにけり
 猪追ひし昂り夜も消えぬ犬
 箸紙に書きて勘亭流ならず
 年ゆゑの粗相はかなし喰積に
 車窓より鉄道草の枯るるを見
 芒枯れ泡立草の枯れなんと

長岡 安原 葉
 同 同 同
 東京 稲畑廣太郎
 同 同
 尼崎 中村芳子
 同 同
 豊中 瀧 青佳
 同 同
 たつの 浅井青陽子
 同 同
 樞原 稲岡 長
 同 同
 相模原 木村享史
 同 同
 神戸 後藤比奈夫
 同 同
 福岡 松尾緑富
 同 同

鷹柱よりこぼれたる二羽三羽
 流し目を残して去りし北狐
 師弟句碑越後に絆結ぶ秋
 旅淋し雨の尾花となりし帰路
 熱爛や当るはずなきくじも買ひ
 熱爛に世辞など要らぬ輩かな
 阿波の野の風の今昔藍の花
 三百年かく夕日落ち藍の花
 ほほも手も冷たくなりて車椅子
 掃けば散り掃かねば積る落葉かな
 ほろほろと何かこぼるる秋の風
 光陰のいとし秋行く寺座敷
 初冬や少し重たくなりし雨
 落葉踏む風の軌跡を踏むやうに
 鳥のごと櫛黄葉の散るといふ
 短日の道戻りゆく愚かさよ
 落伍して足を労る冬紅葉
 蟪蛄の懺悔のごとく枯れみたり

東京 今井千鶴子
 同 同
 金沢 藤浦昭代
 同 同
 神戸 三村純也
 同 同
 徳島 上崎暮潮
 同 同
 東京 田村 元
 同 同
 同 同
 石川 星水女
 同 同
 神戸 長山あや
 同 同
 明石 中杉隆世
 同 同
 神戸 山田弘子
 同 同

天地有情句評

汀子

隠棲の日々朝露に触るゝかな 豊中 瀧 青佳

隠棲の日々と言つても庭に出て自然に触れた生活。

水亭の景に遅れし冬紅葉 たつの 浅井青陽子

今年の紅葉の盛りが少し遅れたこと残念に思う。

冬鳥の動きの見ゆる雑木林 榎原 稲岡 長

雑木林の仔細の中の動きを捉えた緊張。

猪垣を人は跨いで行きにけり 相模原 木村享史

低い猪垣に驚く作者。

年ゆゑの粗相はかなし喰積に 神戸 後藤比奈夫

それも又年ゆゑのこととは言えども。

その握手が永久の別れとならうとは。

握手して別れしことも露けしや 長岡 安原 葉

コスモスに風は一ト日の旅人かな 東京 稲畑廣太郎

風とコスモスとの出会い。

一病もよせぬ気構へ冬に処す 尼崎 中村芳子

大切に生きて行く心構え。